華麗なるハプスブルク帝国　その永遠の光芒（一）

皇帝ヨーゼフ一世と二人の娘たち

富山典彦

二〇〇九年の秋、成城大学「学びの森」で、この講座は華々しくスタートした。華々しく、というのも、ちょうどその年国立新美術館でハプスブルクの展覧会が開かれていて、その影響で、二五名の受講定員を相当数超え、急遽定員増をしたからだ。

「華麗なるハプスブルク帝国――その永遠の光芒」は、この「学びの森」で筆者が担当する講座の共通の表題として、今もなお続いている。二〇一五年秋冬講座では、「バロックからロココへ」と副題をつけて、三十年戦争からレオポルト一世へと続くこれまでの講座内容を要約したうえで、レオポルト一世の長男ヨーゼフ一世とその弟カール六世、それにあまりにも有名な「女帝」マリア＝テレジアへとつながる歴史をたどってみた。

カール六世とその長女マリア＝テレジアはよく知られているが、その兄ヨーゼフ一世その二人の娘たちについては、これまであまり語られることがなかった。本稿ではこれらの人たち、とくにマリア＝テレジアの従姉たちに目を向けることにしよう。

ハプスブルク家にはもともと、長子単独相続ではなく、そのため、兄弟間の争いもあったが、その一方で、毛利元就の三本の矢に似たようなこともある。多くの諸侯の家系が断絶していくなかで、ハプスブルク家は粘り強く生き続ける。その力の根源には、ともすると無用の争いになるこの相続問題があったかもしれない。

それはともかくとして、皇帝レオポルト一世には二人の息子がいた。長子単独相続ではないといいながら、長男のヨーゼフはオーストリアを相続し、次男のカールは、危機に瀕しているスペイン＝ハプスブ

ルク家のあと、スペインを相続することが、ほぼ決まっていた。

カール五世は、カルロス一世としてまずはスペインを相続したあと、オーストリアも相続して、当時のスペインの広大な海外植民地も併せて、文字通り陽の沈まぬ帝国の皇帝になったが、結局息子にスペイン王を継がせる一方、オーストリアは弟に譲った。ハプスブルク家がスペイン系とオーストリア系に分かれたということになるが、その後、この両家は執拗に婚姻関係を続け、その結果と考えていいのだろうが、両家とも、種としての勢力を減少させていき、スペイン系ハプスブルク家は、カルロス二世を最後に、消滅する。

当然のことながら、オーストリアのハプスブルク家がスペイン王位を継ぐこととなり、カール大公がスペイン王カルロス三世になるのだが、しかし、事はそう簡単にはいかない。ブルボン家が介入してきて、いわゆるスペイン継承戦争が起こるのだが、それはまた別の機会に譲ることにしたい。ここでは、神聖ローマ皇帝を継ぐことが、生まれながらに予定されていた長男ヨーゼフの人生に絞ってみることにしよう。

ヨーゼフは、一六七八年七月二六日にウィーンで生まれた。父のレオポルト一世は三八歳、母はその三度目の結婚相手で、プファルツ＝ノイブルク選帝侯女エレオノーレ＝マルガレーテ二三歳だった。ちなみに最初の結婚相手はスペイン王女マルガレータ＝テレジアで、結婚したときはまだ一五歳、結婚してから六年あまりで亡くなっている。二番目の結婚相手は、オーストリア＝チロル大公女クラウディア＝フェリツィタスで、結婚して二年あまりで亡くなってしまった。

三度目の結婚でようやく息子が生まれたから、おそらく大事に育てられただろうし、帝国の後継者とし

てそれなりに厳しい教育も受けていたはずだ。家庭教師として、のちにウィーン司教になるフランツ＝フリードリヒ・フォン・ルンメルとヴェストファーレンのカール＝テオドール・フォン・ザルム＝アンホルト侯爵が充てられた。

なにしろ、帝国の後継者として、九歳でハンガリー王、一一歳でローマ＝ドイツ王に戴冠している。家庭教師による教育の途中で、次々と宮廷での大事な行事が割り込んできた、ということだろう。

そのせいか、カール大公、いや、一一歳ですでにカール一世王になっているこの少年は、「ハプスブルク的」ではなかったという。「ハプスブルク的」とはどういうことかというと、例えば、カール一世の父親のレオポルト一世が生涯に三度も結婚しているからといって、浮気をしたわけではなく、不幸にして、妻たちが若くして死んでしまったからであり、カール一世の母親とは、死ぬまで仲むつまじかったという。

カール一世は、それに反して、女性たちとのアヴァンチュールを楽しんだということだ。逆に言うと、ペストも克服し、トルコの脅威も遠のいたこのバロック時代に、宮廷が煌びやかになり、そこに数多の美女たちが集まったということだろう。父親から、狩猟と音楽好きを受け継いだカール一世は、名フルート奏者だったそうだが、フルートを吹くその唇は、さぞかし役に立ったことだろう。

そのため、カール一世は二十歳で結婚させられるが、相手は一六七三年生まれのブラウンシュヴァイク＝リューネブルク公女アマーリア＝ヴィルヘルミーネで、五歳年上の女性だった。一七世紀もいよいよ終わろうとする一六九九年の二月二四日にウィーンでこの結婚式が行われた。

長女マリア＝ヨゼファが生まれたのは、この同じ年の一二月八日だから、今流行の「できちゃった婚」

ではなかったとはいえ、新婚初夜の子どもだったに違いない。なお、この一二月八日だが、これはカトリックでは、マリアの無原罪受胎の祝日で、なんとも皮肉な誕生日である。

母の名前をもらった次女マリア＝アマーリアは一七〇一年一〇月二二日の生まれで、ここからいよいよ一八世紀になる。一八世紀とはどのような時代であったのか、簡単に言うことはできないが、一八世紀末に起こるフランス革命のことを考えると、中世以来続いていたであろう宮廷の大幅な改革の必要性に迫られていた時代、とでもまとめておくことにしよう。

決断力と指導力が欠如していたと、皇帝としての評価はあまり高くないものの、凝り固まった政治システム刷新の情熱だけは持っていたらしい。ヨーゼフ一世の周囲には、志を同じくする者たちが集い、「若い宮廷」と呼ばれていた。その先頭には、あの英雄プリンツ・オイゲンがいた。スペイン継承戦争に介入し、ヘヒシュテットでの勝利を祝うために、この軍事的天才の存在は欠かせなかったであろう。

いずれ神聖ローマ皇帝になるヨーゼフ一世と、スペイン王になった弟カール大公、すなわちカルロス三世が手を組めば、ハプスブルク家はまた、フランスを挟み撃ちにすることも可能である。しかし、一七〇五年五月五日に、四七年間皇帝位にあった父、レオポルト一世が死んでしまう。ヨーゼフ一世は戴冠式もせずに、この日にボヘミア王となり、もちろん、名前だけとはいえ神聖ローマ皇帝になる。

ここから、ヨーゼフ一世の政治改革が本格化することになる。しかし、わが国の江戸時代の三大改革を見てもわかるように、改革ほど難しいものはない。シレジアの家領で実験的に農奴解放をしてみたりもしたが、宮廷はもちろんのこと、新旧ふたつの勢力に分裂する。母親である前皇帝の未亡人エレオノーレと

ヨーゼフ一世のかつての家庭教師ザルム侯爵、それに対する「若い宮廷」のヘッドであるプリンツ・オイゲンと外交官ウラディスラウ伯爵が、その二大勢力であった。

もっとも一七〇九年にザルム侯爵が重病になり、旧勢力が弱体化するものの、肝心の皇帝自身も、一七一一年四月一一日には、当時流行し始めていた天然痘で死んでしまう。フランスを挟み撃ちにするどころか、ハプスブルク家そのものの危機である。もっとも、一七〇九／一〇年にフランスとの和議が成立していたが、和議など、歴史上掃いて捨てるほど存在しているから、これほどあてにならないものはない。弟カルロス三世は、妻をスペインに残したまま、急遽ウィーンに帰還する。

フランスとの戦いにおいては、プリンツ・オイゲンの活躍でなんとか支えてきたものの、足下のハンガリーでは、これまでずっと反抗が続いていた。ヨーゼフ一世の死後になってようやく、ヨハネス・パルフィ伯爵の仲介により、ハンガリーの反抗も沈静化するものの、またまたスウェーデン軍が中部ドイツに攻め込んできて、決着のついていないスペイン継承戦争と、このハンガリーの反乱とが一つになってしまう危機の前に立たされていた。

このような情勢にあってもなお、皇帝に上り詰めた者は、止まるところを知らない支配欲に駆られるのか、マントゥア公領に侵攻し、ローマ教皇領までをも脅かしている。ローマ皇帝とローマ教皇、どちらか上か、などという洒落にもならないクイズのような問題が、啓蒙の世紀にもまだ燻っていたとは、驚きであるが。

ハプスブルク帝国は、もちろんカトリックの帝国だが、ローマ教皇との確執は、なかなか難しい問題で、

これに取り組んだのが帝国副首相フリードリヒ＝カール・フォン・シェーンボルンであった。

文化面では、ヨーゼフ一世は生涯にわたり芸術と音楽の支援者であり、その伝統は、次のカール六世からマリア＝テレジア、そしてヨーゼフ二世にまで受け継がれていく。一方、若いときの病気ともいえる女癖の悪さは、ハンガリーの貴族パルフィ伯爵令嬢マリアンネ・パルフィとのアバンチュールへと続いていたようだ。

さて、このヨーゼフ一世の二人の娘マリア＝ヨゼファとマリア＝アマーリエだが、二人とも、しかるべき夫と結婚している。二人とも、マリア＝テレジアの従姉ということになるが、一七一七年生まれのマリア＝テレジアとは、この当時のことだからそれこそ親子ほどの年の差がある。少女時代にいっしょに遊んだなどという経験もないことだろうし、あのオーストリア継承戦争で敵になるのは必然のことではあった。

長女マリア＝ヨゼファは、一七一九年にザクセン選帝侯でありかつポーランド王でもあったアウグスト二世の息子、フリードリヒ＝アウグストと結婚した。残された絵を見る限り、堂々とした体格で、男系の絶えたハプスブルク家にあって、それを率いていくだけの貫禄はあったように思われる。

ただ、夫のザクセン選帝侯には、それほど高い政治的能力はなかったようで、父が亡くなったあと、ポーランド王位をめぐって戦争が起こり、一七三三年にかろうじてポーランド王に選出されたものの、一七四〇年に伯父の皇帝カール六世が死んだあと、ザクセン選帝侯にも皇帝の番が回ってきそうなのに、それは妹の夫であるバイエルン選帝侯の夫カール＝アルブレヒトに先を越されてしまう。しかし彼も、一七四二年に皇帝カール七世になったものの、一七四五年に死んでしまい、さあ今度こそと狙いもしたが、結局

従姉マリア＝テレジアの夫であるフランツ＝シュテファンが皇帝フランツ一世となり、終幕を迎える。

もしも男に生まれていたら、と嘆いてみても仕方がないが、マリア＝テレジアの一六人にはかなわないものの一四人の子どもを産み、一七五七年一一月一七日にドレスデンで死んでいる。

それに対して、妹のマリア＝アマーリエは、母親に似た小柄な体格ではあるが、その分活発で自意識過剰だったようだ。一七一三年に時の皇帝カール六世が国事詔書を出したとき、まだ独身だったマリア＝アマーリエは、一応それを承認し、カール六世の子どもの誰かにハプスブルク家の家領をすべて相続させることが決まっていた。

結婚した相手が、これまでハプスブルク家とはライバルの関係にあったバイエルン選帝侯ヴィッテルスバッハ家のカール＝アルブレヒトだった。一七二二年、宿敵マリア＝テレジアがまだ五歳の幼女だったときである。当時のバイエルン選帝侯マックス＝エマニュエルは、将来皇帝になるかもしれない、いや是非ともならせてみようという意気込みで、この結婚に際して、ウィーンで披露宴をしたあと、三週間にわたるミュンヘンでの祝宴を催した。十万グルデンの持参金と百万グルデンの装飾品をこの嫁はバイエルンにもたらしたが、バイエルン側ではなんと、この祝宴のために四百万グルデンを支出したということである。

狩猟のときの絵が残っているが、姉とは違って痩身で、目つきも鋭く、油断ならない表情である。趣味はこの狩猟と、宮廷での祝宴、それに旅行三昧ということで、政治にも参画した。一七二六年に夫がバイエルン選帝侯を継ぐと、後にマリア＝テレジアが狩猟館カッターブルクをあのシェーンブルン宮殿にし

たように、狩猟館アマーリエンブルクをニュンフェンブルク公園、妖精城公園にした。そのなかにはもちろん、ロココの真珠と称えられる宮殿、ジルバーシュロースヒェン、銀の小宮殿が建てられている。

ハプスブルク家が、ブルゴーニュのマリーから受け継いだ金羊毛騎士団に対抗したのか、ゲオルゲ騎士修道会を再興し、アルトエットゥングやロレートなど、ヴィッテルスバッハ家ゆかりの巡礼地を整備しなおした。

一七四二年には夫が念願の皇帝カール七世になったとき、自らは皇帝妃となるものの、その夢はたった三年で消えてしまう。一七五六年一二月一一日に、還暦を迎えることなく、夫はミュンヘンで死亡するが、しかしまあ、還暦という考えはなかっただろうけれど。

さらに、夫がバイエルン選帝侯になった翌年一七二七年に生まれた息子、バイエルン選帝侯マクシミリアン三世が一七七七年に死んだとき、ヴィッテルスバッハ家の嫡流の血筋までが絶えてしまう。

バイエルンの首都ミュンヘンもザクセンの首都ドレスデンも、ウィーンとはまた違った雰囲気の都市だが、とくにゼンパー・オーパーのあるドレスデンは、第二次世界大戦での空爆さえなければ、本物の古都として、今もドイツの一角に鎮座していただろうが。

本稿は、「成城学びの森」二〇一五年秋冬講座で話した内容を文章にまとめたものである。これまでこの講座でさまざまな話をしてきたが、それらを文章としてまとめていく予定であり、その手始めとして、最近の話題を拾ってみた。参考文献その他は、この「華麗なるハプスブルク帝国　その永遠の光芒」をもう少し本格的に書き進めた段階で、順次提示していくつもりである。